

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：14303  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2019～2023  
課題番号：19K02641  
研究課題名（和文）集団保育時の子どもと保育士及び子ども同士のやりとりのデータベース構築とその分析

研究課題名（英文）The creation of a database of teacher-children and children's peer interactions in Japanese daycare centers and the investigation of children's communicative development

研究代表者  
深田 智（Fukada, Chie）  
京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：70340891  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本では、子どもたちの多くが乳幼児期から集団保育・集団教育の中で育つ。本研究では言語獲得や社会性の発達においてこの現状が果たす役割を重視し、集団保育・集団教育の場での子どもたちと指導者（先生、活動補助者など）及び子ども同士のやりとりに着目してデータを採取・蓄積しながら、場面や状況、子どもの年齢などと、ことばや動き及びそれ以外の表現手段（姿勢、位置関係など）との関係について考察した。また、親子間のインタラクションとの異同や、ある場内あるいは発達過程内で見られる子どもたちの変化とそれに応じて変わる指導者からのことばがけや態度についても検討した。その成果は書籍の執筆や書評、共同研究に反映された。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、集団保育・集団教育の現場で繰り広げられる子どもたちと多様な他者とのやりとりを採取・分析し、親子間のインタラクションとも比較しながら、子どもたちの表現及び表現手段の広がりや社会性の発達における集団保育・集団教育の意義について検討してきた。本研究で得られた知見は、保育学や幼児教育学だけでなく、子育てを社会全体で支える仕組みを考える上でも有益な知見となりうる。また、ことばだけでなく、動き、姿勢、位置といったことば以外の表現手段にも注目し、場面や状況、年齢なども考慮に入れながら考察を加えたことで、言語学だけでなく発達科学や認知科学などといった関連領域の進展にも貢献しうる知見を得られた。

研究成果の概要（英文）：In Japan, most children grow up in group care and group education from infancy. This study focused on the role of this situation in children's language acquisition and socialization. By gathering and analyzing the data on the interactions between children and instructors (or support staff) and among children in these group sessions, the study described in detail their use of language, behaviour and other means of expression (e.g. posture, positioning). The study also examined both the in-session changes and the developmental shifts, carefully attending to child(ren)'s age and the environments they are situated in. Additionally, by comparing these group interactions with parent-child interactions, the study showed distinctive characteristics of the group sessions which encourage children's linguistic and social development. The results were published in several book chapters, a book review, oral presentations and collaborative studies with researchers in related fields.

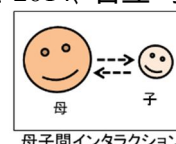
研究分野：認知言語学、言語獲得、認知科学

キーワード：集団保育・集団教育 インタラクション コミュニケーション 発達 表現・ことば・動き 関係構築

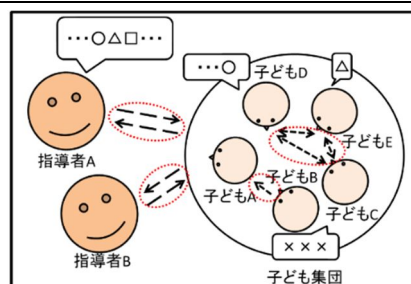
## 1. 研究開始当初の背景

日本では、乳児期には3割の子どもが、また幼児期からはほぼ全員の子どもの、何らかの集団保育・集団教育の場で育っている(秋田 2016 も参照)。子どもは、この「集団に関わりながら、さまざまな関係を受けとめ、人格を形成」(上野・片山 1996)し、保育者との関係や子どもどうしのつながりの中で変わっていく(赤木 2017)。保育所保育指導指針では「現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」ために、また幼稚園指導要領では「生きる力」の基礎を育てるために、「健康」「環境」とともに、「人間関係」や「言葉」と(声、表情、身体の動き等を含む)「表現」が指導領域として示されていることも考慮するならば、(i)保育所や幼稚園を中心に、子ども集団を対象とした保育・教育の中で、保育士・幼稚園教諭をはじめとする指導者は、どのような言語的及び非言語的方略を用いて子どものことばやその他の表現手段の獲得・発達を促しているのか、(ii)子どもは、指導者や他の子どもとのやりとりを通して、自身のことばや表現をどう分化・多様化させ“社会性”を身につけていくか、を研究対象とすることは非常に重要であると考えられる。

もちろん言語獲得・言語発達に関しては、国内外を問わず、すでに言語学、発達心理学、発達科学、認知科学をはじめ、多くの分野で多様な観点から盛んに研究が行われ、興味深い事実が多数提示されてきている(Clark & Kelly 2006、今井 2013、今井・針生 2014、岩立・小椋 2017、『認知科学』Vol. 23, No.1 の特集「ことばはどのようにしてことばになるのか」等、枚挙にいとまがない)。また言語獲得の前段階では、声や視線、ジェスチャー等の非言語情報も重要な役割を担うため、ことばだけでなく、ことば以前の「表現」にも注目した研究も多い(高田・嶋田・川島 2016、やまだ 1987 など)。しかし、これらの研究で主として調査対象とされてきたのは、母子間のインタラクション、母と子という非常に限られたタイプの1対1の人間関係を通して見えてくる言語獲得・言語発達である。乳児期において最も近い他者である母親とのやりとりが言語獲得とその後の言語発達に大きな影響を与えることは否定できない。しかし、上述したように、乳児の3割以上、幼児のほぼ全員が保育所や幼稚園をはじめとする集団保育・集団教育の場を利用して



いる現状は無視できない。こういった**集団保育・集団教育の場で実際にどのようなやりとりがなされ、母子間のそれと比較した際にどのような特徴が見られるか、異なる指導者に対して異なることばや表現を使うようになるのはいつ頃でそれは何がきっかけとなるのか、友だちどうしの会話と先生との会話で用いることばや表現を変えるのはいつ頃でその契機となったのは何か、**などが明らかになれば、子どもの言語発達や社会性の獲得に対する新たな知見を提供できる。



しかしながら現時点では、母子間のインタラクションを中心に収集したデータベース、CHILDES に相当するような、集団保育・集団教育の現場における指導者と子ども(たち)とのインタラクションを収集したデータベースは研究代表者の知る限り存在しない。加えて**集団保育・集団教育の現場における子どもどうしのインタラクションを収集したデータベースもなく、また、場面ごとのデータや縦断データの蓄積もない。**

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、集団保育・集団教育の中で行われているいくつかの活動に注目し、年齢別保育・教育だけでなく、異年齢保育・教育にもその射程を広げ、その活動内での指導者と子どもたち、及び、子どもどうしのインタラクションを、言語・非言語・運動の観点から分析することを目指して、この種のデータを可能な限り採取してデータベースを作成するとともに、採取したデータを以下の3つの観点から分析することを研究目的として掲げた。

- (a) 【**集団保育・集団教育に見られることばと表現の特性**】母子間のインタラクションでは出現しない、集団保育・集団教育だからこそ見られることばや表現とは何か。
- (b) 【**社会性の発達**】子どもは、多様な他者(先生、指導者、親、補助員、友だち、年上・年下

の子ども、など)に合わせて、また、集団保育・集団教育の場(《外》)と家庭(《内》)とで、いつ頃からどのようにことばやその他の表現を使い分けるようになるのか。また使い分けられるほど多様なことばと表現をどう獲得するのか。

- (c) **【社会性の発達を導く契機】**(b)を促す契機となるような、他者、とりわけ先生や指導者、親などの大人からのことばや表現は認められるか。

### 3. 研究の方法

母子間インタラクションとの比較を考慮し、本研究では、主たる採取データを、保育園などの集団保育・集団教育の場での、(i)絵本の読み聞かせ場面と、(ii)リズム運動などの集団運動セッション場面のデータとした。絵本の読み聞かせは、母子間インタラクションでもよく見られ、先行研究の対象ともなっている。(i)のデータを採取することで、両者の比較が可能になると推測された。他方、(ii)の集団運動セッションは、運動という、母子間インタラクションではほとんど見られない活動が主になっていること、また、指導者が子どもどうしのインタラクションを促す場合が多いと予想されること、などから、集団保育・集団教育の中だからこそ用いられることばや表現が明らかになると推測された。

本研究では、上記(i)(ii)を中心に、可能な限り多様な場面のデータを採取することを目指し、下記の に加えて や ような場面もデータ採取場所・場面とした。

**【保育園】**子どもたちの興味に合わせて様々な活動が行われる延長保育の時間帯、及び、保育時間内に行われているリズム運動セッション、など。上記(i)の絵本の読み聞かせ場面は、延長保育の時間帯に見られ、リズム運動セッションは、上記(ii)の集団運動セッションのデータとなる。

**【学童クラブ】**運動(ソーラン節、キックベースなど)練習時など。上記(ii)の集団運動セッションのデータが採取できる。

**【研究代表者が実施する子どもを対象とした集団運動セッション】**ペアあるいはグループでの運動、音楽に合わせた運動、など。上記(ii)の集団運動セッションを中心としたデータが採取できる。加えて、このセッションは2017年度から年1~2回実施してきているため、継続して参加している子どもも多く、また同じ保育園に通っていた、もしくは、同じ小学校に通っている等の理由で普段から互いに付き合いのある子どもも多い。成長に伴う社会性の発達やそれに伴うインタラクション手段・戦略の変化を捉えることができると考え、本研究でも継続して実施することとした。

保育園や学童クラブでのデータ採取に関しては、子どもたち及び指導者たちの人権保護を最優先に掲げ、参与観察をしながら音声データのみを採取することとした。他方、研究代表者が実施する集団運動セッションに関しては、これまでの実施経験に基づき、セッション全体の様子と個別のインタラクション双方のデータを採取するために、ビデオカメラを複数台用いることとし、また、必要に応じて小型マイク等で音声データも採取することとした。

分析に関しては、指導者と子ども(集団)とのやりとり、及び、子どもどうしのやりとりに注目し、ことばと動き、視線、姿勢、身体的距離など、多様な観点から、場面や環境、年齢等の要因も考慮して検討することとした。また、本研究で実施する集団運動セッションでは、指導に当たる先生だけでなく、大学生・大学院生も子どもたちの活動補助者として参加することから、この両者を指導者とみなし、彼らと子ども(たち)のやりとりを幅広く考察することとした。特に、大学生や大学院生はセッション当日に子どもたちが初めて会う大人であることが多く、そのような指導者と子どもたちが具体的にどのようなインタラクションを行い、それを通してどのような関係を築いていくか、その過程を検討することができると考えた。また、子どもどうしのやりとりに関しても、異年齢の子どもの場合と同年齢の子どもの場合とを考慮して検討することとした。

加えて、本研究で採取したデータを分析する際には、研究代表者が参画していた保育園児対象の身体表現活動セッションのデータや、研究代表者がこれまでに採取していた子ども向け集団運動セッションのデータ、研究代表者が母親や保育士などに対して行った子どもへのことばがけに関する予備調査の結果や研究代表者の育児日誌(保育園の連絡ノートを含む)のデータなども再検討し、これらと比較しながら子どもたちのインタラクション手段ないしインタラクション戦略の発達の变化や、場面や状況の影響などについて考察することとした。また、これらを通して得られた知見の妥当性を高めるために必要に応じて検証実験を行うこととした。

#### 4. 研究成果

上述したように、本研究の目的は、集団保育・集団教育場面における指導者と子どもたち及び子どもどうしのインタラクションをセッション内での変化と発達に伴う変化の双方から検討するために、集団保育・集団教育における様々な場面のデータを採取・蓄積・保存し、ことばとその他の表現手段に注目して分析することにある。ことばの分析に関しては、主として言語学の観点から、また、動きをはじめとするその他の表現手段の分析に関しては、言語学はもちろん、発達科学、スポーツ科学、幼児教育学、認知心理学等、関連分野の知見にも言及し、研究協力者をはじめとするそれぞれの専門家の助言も仰ぎながら分析を進めた。

2019年度は、集団保育・集団教育の一実践現場である近隣の保育園と学童クラブとで、それぞれ数回ずつ、運動指導場面や絵本の読み聞かせ場面を含む様々な場面の参与観察と音声データの採取を行うとともに、研究代表者が継続して行っている子どもを対象とした集団運動セッションも2回実施した。保育園や学童クラブでデータを採取する場合には、通常と変わらない子どもたちと指導者、及び、子どもどうしのインタラクションを採取するために、小型マイクの設置位置や参与観察者である研究代表者の観察位置などを検討する必要性が生じた。その結果、ノイズの多いデータも含まれることになったが、いずれのデータも日付毎にまとめて整理し、観察ノートが取れた場合には、それもPDF化して保存した。さらに、集団運動セッションに関しては、実施前に指導者となる先生方と参加児の年齢や運動技能のレベル、運動内容や子どもたちどうしの関係などを確認し、研究補助者である大学生・大学院生とも入念な打ち合わせをして実施した。その採取データは、参加児の年齢や人数、活動内容をまとめた上で、すでに収集済みのデータと合わせて整理・保存した。また、子どもたちの主体性の発現や子どもどうしの横のつながりに着目して、研究代表者が参画した保育園児対象の身体表現活動セッションのデータの分析を行い、その論考を共同執筆した書籍で発表した。

2020年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、保育園や学童クラブといった集団保育・集団教育の現場のデータ採取は控えざるをえなかった。代わりに、すでに収集済みのデータ(保育園児対象の身体表現活動セッションのデータ、これまでに採取した子ども向け集団運動セッションのデータ、母親や保育士などに対して行った子どもへのことばがけに関する予備調査の結果、育児日誌のデータなど)を本研究の視点から再検討し、また、CHILDES から本研究に関連する新たなデータを採取するなどして研究を進めた。例えば、保育園児対象の身体表現活動セッションのデータに関しては、相互適応という観点から分析を行い、子どもたちのありのままを受け入れてかける指導者からのことばと、その指導者のことばを受けて応じる子どもたちのことばや態度、さらには、それを受けての指導者のことば、といったやりとりの連鎖を詳細に記述した。その中で、指導者は、子どもたち全員を受け手とする「みんな」や終助詞の「ね」、問いかけの「かな」などを使って子どもたちの注意を自分に引きつけ、活動への参加を促していること、また、子どもたちが目標となる動きができるようになると、それを承認するかのよう「できた、できるじゃん、Nくーん」などと声をかけること(研究代表者はこの種の「できる」を「承認」の「できる」と呼んでいる)、そしてその承認のことばは子どもたちの積極的な活動参加とさらなる動きの獲得を促すこと、などを明らかにした。その成果は、共同執筆した書籍の論考に反映されている。その他、共同執筆した別の書籍では、運動指示のことばを、集団保育・集団教育時の指導者からのことばがけにも注目して、言語学的な観点から検討したり、あるいは、子どもの言語、社会性、運動能力の発達を、先行研究の知見を軸に、CHILDES から採取した英語データや育児日誌からの事例等にも言及しながら、意味論・語用論、認知言語学と関連づけて論じたりした。

他方、子どもを対象とする集団運動セッションは、コロナ禍にあっても、三密を避けるなどの感染対策を講じて継続して実施した。2020年度に採取した集団運動セッションのデータに関しては、参加児の一人に焦点を当て、研究補助者である大学院生とのやりとりとその変化を、信頼感の構築に着目して記述した。Tomasello (2019)や Goodwin (2017)などの知見を援用し、子どもの年齢や社会性の発達、間身体性などの観点から多角的に検討した論考は、共同執筆した書籍の中で発表されるとともに、言語系の研究会(『京都言語学フォーラム』2022年3月29日、オンライン)では、人どうしのコミュニケーションの進化・発達に関する先行研究と関連づけて再考され、口頭発表された。

さらに、子どもに対する指示や承認のことばへの注目は、指導者や母親などから子どもにかけられる、子どもの行為を促し、自分とのインタラクションに引き込むことばへの注目につながった。

その研究の中で、研究代表者は、CHILDES データベースから採取した英語の I wonder の事例を日本語母語話者の大人の対子ども発話に見られる「かな」と比較し、子どもへのことばがけに関する文化を超えた普遍性と個別性について検討した。その成果は、日本英文学会関西支部大会第 17 回でのシンポジウムにおいて「他者への行為の促しと引き込み：養育者-子ども間のインタラクションデータから」として発表された（『日本英文学会関西支部第 17 回（2022 年度）Proceedings』（[https://www.elsj.org/kansai/?page\\_id=2677](https://www.elsj.org/kansai/?page_id=2677)）も参照）。またこれまでに発表してきた、子ども（たち）と多様な他者とのインタラクションに関する研究成果のいくつかは、さらなる議論と考察を加えて学術書の担当章の一部に組み込まれた（2023 年 7 月に初校提出済み）。

本研究における以上のような取組を通して現時点で得られた研究開始当初に掲げた 3 つの問いに関する回答は、以下の通りである。

(a) **【集団保育・集団教育に見られることばと表現の特性】**母子間のインタラクションでは出現しない、集団保育・集団教育だからこそ見られることばや表現とは何か。

子どもたち全員を指し、子どもたち全員の視線がこちらに向くように誘導することばとしては「みんな」が、子ども一人一人の行為の承認のためのことばとしては子ども一人一人の名前と共起した「できる」が、それぞれ用いられる。また、子どもたちとの関係構築に寄与することばとしては終助詞「ね」「よ」が、子どもたちからの反応を引き出すことばとしては「かな」が用いられるが、これらは母子間のインタラクションでも同様の機能を持つことばとして用いられている。

(b) **【社会性の発達】**子どもは、多様な他者（先生、指導者、親、補助員、友だち、年上・年下の子ども、など）に合わせて、また、集団保育・集団教育の場（《外》）と家庭（《内》）とで、いつ頃からどのようにことばやその他の表現を使い分けられるようになるのか。また使い分けられるほど多様なことばと表現をどう獲得するのか。

本研究では、少なくとも6歳の段階で、初対面の大人（活動補助者としての大学院生）に対しては、すでに関係が構築されている指導者の場合とは異なる姿勢や態度、物理的な距離の取り方などが見られることが明らかになった。またこの6歳の段階での表現や振舞は、大人にも容認可能な社会的規範に則った反応・行動で（5-6歳児の社会性に関する Tomasello (2019) の議論も参照）、子どもがその場の状況を十分に理解していることを示唆するものであった。加えて、初対面の大人であっても、活動を共にし、言語・非言語で交流する中で、信頼関係が徐々に構築され、それとともに子どもの表現も変わることも明らかになった。

(c) **【社会性の発達を導く契機】**(b)を促す契機となるような、他者、とりわけ先生や指導者、親などの大人からのことばや表現は認められるか。

この問いに関しては、現在、採取したデータをもとに分析中であるが、例えば、「お兄さんお姉さんになったから、回れる？」のような指導者からの承認や問いかけ、多様な表現手段や表現方法を試行錯誤しながら獲得していく子どもたちの傍らで、その様子を見守り、受け入れ、時にそれに合わせる大人の行為などは、この種の契機の1つと考えられる。

集団保育・集団教育の中だからこそ、子どもたちは、多様な他者に出会い、その一人一人との関係性を自分で見極めながら、様々な表現手段や表現方法を獲得・調整できるようになる。今後もその姿や過程を、指導者や大学生・大学院生、友だちといった異なる他者とのやりとりで見られる子どもたちのセッション内での変化や経年変化に注目して記述し、子どもたちの言語獲得や社会性の発達に集団教育・集団保育が与える影響について考察する。また本研究期間内ではデータ採取とやりとりの記述が中心となったが、説明力を高めるには、さらなる調査に加えて実験も必要であると考えている。2024 年度中に実験を 1 つ開始予定である。

なお、本研究で得られた知見は、子育てや子どもの発達を社会と関連づけて考える上で、また、人工知能や発達科学などの研究者との共同研究においても、有益な知見となった。後者の成果は、共著者としての学会発表や学会投稿論文に見られる。その他、人-人インタラクションにおけることばの役割やことば以外の表現手段、ことば（の意味）と身体感覚や知覚、脳との関係について考えを深めるために、学会や研究会、講演会やセミナーにも積極的に参加して有益な情報を得た。この種の情報を含め、本研究を通して得られた知見は、言語を表現・思考手段の 1 つとして捉え、感覚運動経験との関連でことばの意味を考究してきた研究代表者を次の新たな課題へと向かわせる原動力となっている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 深田智	4. 巻 15
2. 論文標題 《指示》の文法を考える ジャンプ動作実験結果に関する言語学的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知言語学論考	6. 最初と最後の頁 67-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深田智	4. 巻 第13巻
2. 論文標題 「見ること」：解釈から表現、そしてまた解釈へ 宮崎清孝・上野直樹『視点』東京大学出版会、2008 [1985]. viii+222 pp.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英文學研究 支部統合号	6. 最初と最後の頁 191-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松島茜・岡夏樹・深田智・吉村優子・川原功司	4. 巻 vol. 120 (no. 427)
2. 論文標題 VLS-BERT: 視覚・言語・主観的感覚からの終助詞の意味獲得	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深田智	4. 巻 8
2. 論文標題 [書評] Fumino Horiuchi, English Prepositions in Usage Contexts: A Proposal for a Construction-Based Semantics Tokyo: Hituzi Syobo, 2022, 210pp.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 認知言語学研究	6. 最初と最後の頁 119-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深田智	4. 巻 オンライン
2. 論文標題 他者への行為の促しと引き込み：養育者-子ども間のインタラクションデータから	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本英文学会関西支部第17回(2022年度) Proceedings	6. 最初と最後の頁 2頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 萬處修平, 岡夏樹, 松島茜, 深田智, 吉村優子, 川原功司, 田中一晶	4. 巻 31
2. 論文標題 主観情報入力型BERTによる発話の意味理解：自己注意の連鎖に注目した内部表現の分析	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 205-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11225/cs.2023.082	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Chie Fukada, Yukiko Nishizaki, Kaishi Sasaki, and Noriyuki Kida
2. 発表標題 Our construal and bodily actions are impacted by changes in language and virtual viewpoints
3. 学会等名 CogSci 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shuhei Mandokoro, Natsuki Oka, Akane Matsushima, Chie Fukada, Yuko Yoshimura, Koji Kawahara, and Kazuaki Tanaka
2. 発表標題 Construction and evaluation of a self-attention model for semantic understanding of sentence-final particles
3. 学会等名 Workshop on Constructive approaches to co-creative communication in Joint Conference on Language Evolution (CCC in JCoLE) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡夏樹・松島茜・萬處修平・深田智・吉村優子・川原功司
2. 発表標題 Subjective BERT: self-attentionによる「おいしいね」「おいしそうだよ」の意味理解
3. 学会等名 日本認知科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiromichi Hagihara, Tenchi Mizutani, Hiroki Yamamoto, Chie Fukada, Masa-aki Sakagami
2. 発表標題 A data-driven approach to characterize young children's vocabulary development
3. 学会等名 LCICD 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 米倉よう子 (編) [ 執筆: 大橋浩・朱冰・堀江薫・米倉よう子・町田章・深田智・佐々木真・木山直毅 ]	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 198
3. 書名 意味論・語用論と言語学諸分野とのインターフェイス	

1. 著者名 菅井三実・八木橋宏勇 (編) [ 著者: 深田智、他34名 ]	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 401
3. 書名 認知言語学の未来に向けて	



1. 著者名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）[著者：深田智、他12名]	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 276
3. 書名 動的語用論の構築へ向けて 第2巻	

1. 著者名 児玉一宏・谷口一美・深田智（編著）[著者：深田智、他12名]	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 265
3. 書名 はじめて学ぶ認知言語学 ことばの世界をイメージする14章	

1. 著者名 辻幸夫（編集主幹）、深田智（62位/80名）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 847
3. 書名 認知言語学大事典	

1. 著者名 池上嘉彦・山梨正明（編）、深田智（18位/19名）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 427
3. 書名 講座 言語研究の革新と継承 5 認知言語学 II	

1. 著者名 米倉よう子・山本修・浅井良策（編）、深田智（37位/38名）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 426
3. 書名 ことばから心へ：認知の深淵	

〔産業財産権〕

〔その他〕

キッズ運動チャレンジ！ <a href="https://kidschallenge.jimdofree.com/">https://kidschallenge.jimdofree.com/</a>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------